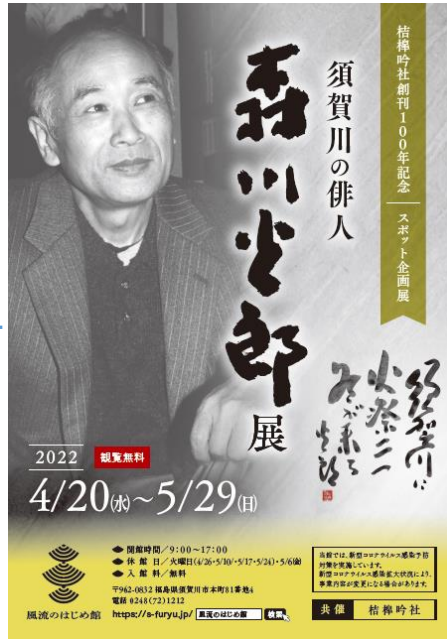




森川 光郎

本名、光郎(みつお)。1926年、須賀川市八幡町に7人兄弟の4男として生まれる。1950年、「桔槔吟社」に入会。1955年、「鹿火屋」に入会。「桔槔」編集長などを経て、代表を務める。句集に『春耕』『須賀川』など。

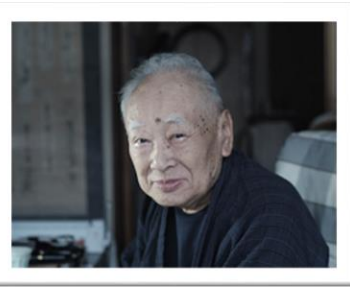


桔槔吟社 (きっこうぎんしゃ)
大正11年創設の俳句結社です。

風流のはじめ館

2022
第10号
5月号

<https://s-furyu.jp/>



森川光郎氏は96歳になった今もなお歩き続けている。ひたすらに俳句の道をゆく。本展では、森川光郎氏の軌跡や作品、同時代に生きた俳人たちのつながりを紹介しています。

森川光郎氏が俳句に興味を持つきっかけは、叔父である桔槔吟社同人の竹内翠玉に生まれてはじめて作った俳句をほめられたことだという。以来90年近い歳月を俳句とともに森川氏は歩んできた。

森川氏と二人の師

裕先生の俳句は悠揚として風格のある王朝風の俳句。近づき難い高さがあって。投句した俳句を選んでもらい、随分とかわいがってもらった。

森川氏と原裕

俳句が上手いと思う人はたくさんいたが、とにかく龍太の作る俳句が好きだった。文章を読んでな好きになり、会ってますます好きになった。目指すべき人はこの人だと思った。

森川氏と飯田龍太

【おもな作品】
須賀川に火祭二つ冬が来る
須賀川の坂をよるこぶ春の風
待ちわびて子に来るきゆうり天王さま
牡丹焚火父の火の色見えて来ぬ
槌音のとおんと帰る桃の花
万緑や見上げるために山はあり
水引やたつぷりと水吸ひし山
白障子朝は海より来たりけり
潦涼と森の狐に月のぼる
忘れ潮やにはに春の雲みだれ
ジュース飲む春の山から片手出し



第一回
すかがわ大人塾



軸装 ぼたるてんでんだれによばれてとぶのやら
額装 ぼんぼんと日和投げ合ふ牡丹かな
色紙 滝しぶきおんおんと吸ふ一樹あり
色紙 ぜいたくは草原にふる夏の雨
色紙 みんみの声の晴間の峠口
色紙 日をあびてすぐ蟬の木となりけり
額装 山嶺の背にたらたらと緑さす

夏の作品から

5.18(水) 自由な発想で絵や文字を書き、
5.25(水) 表装をし、墨を遊ぶ感覚で墨に親しみます。



俳句ポスト表彰式を開催しました

令和三年度



牡丹賞 大澤 良州

白もまた燃ゆる色なり白ぼたん

赤松賞 安藤スミ子

ひとり来て秋のふかまる牡丹園

翡翠賞 渡辺まり子

時空超え芭蕉に触れる秋の空

ぼたん賞 五十嵐 心

おもいつきり紙ひこうきを夏空へ

あかまつ賞 須藤 楓真

校庭に子ども百人暑い夏

かわせみ賞 関 晶太

うんどうかい校ちよう先生とジャンポン

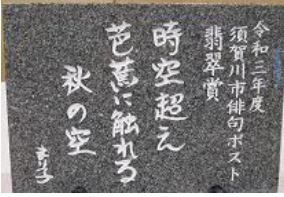
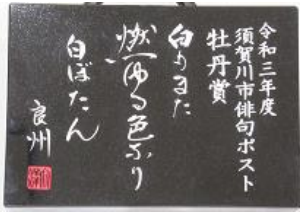
等躬賞

須賀川市立仁井田小学校

須賀川市立柏城小学校

令和3年度 受賞作品

受賞者(一般の部)への副賞として自筆でかいた受賞句を御影石に彫った石盾を贈りました。



色付けをした短冊に自筆でかいた13名(年間特選、秀逸、年間入選者)の作品をオープンギャラリーに展示しています。

名句鑑賞



版画「おくのほそ道」千住小野塚虎男

行く春や鳥啼き魚の目は泪

春が過ぎ去ろうとしているが、それを惜しんで鳥は鳴き、魚は目に涙を浮かべているかのようだ。旅に出る自分も見送る人々も、共に別れを惜しんで涙を流している。

1689年3月27日(今の暦では5月16日)旅立のとき、見送りの人々と別れたときによんだ句です。

言の葉

さつき 皐月

5月の異称。「早月」とも

いい、早苗を植える月の意。



ぼたん 牡丹

奈良時代に薬用として伝来した後、装飾や工芸品の文様として用いられます。その豪華さから富と権力の象徴ともされ、武士にも好まれました。

あさ は 麻の葉

子どもの健やかな成長の願いが込められています。また魔除けの意味があり、昔から産着の柄として広く親しまれています。



おしらせ

6/2(木)

6月からのテーマ展 「芭蕉とおくのほそ道」

風流の民話館

(主催すかがわ昔話の会)

5/29(日) 13:30~

ミニコンサート 俳句をうたう (主催 tette) 申込要

5/21(土) 10:00~



俳句募集

募集期間 通年

選句会 年2回(8月 1月)

部門 一般の部・子どもの部

学校の部

設置場所

牡丹園 乙字ヶ滝 長松院 十念寺 栗谷沢 宮の辻 博物館 tette 市役所 可伸庵跡 結の辻 市民の森 市民温泉 コミュニティプラザ 悠久の里管理センター 藤沼温泉やまゆり荘 風流のはじめ館